

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 MANINGO Rhea Mae Pleños

論 文 題 目

Agency and Everyday Politics of the Urban Poor:  
Development-induced Displacement and Resettlement in  
Metro Manila, Philippines

(都市貧困層のエージェンシーと日常の政治——フィリピン・マニラ首都圏における開発に伴う立ち退きと再定住)

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日下 渉
委員	名古屋大学	教授	伊東 早苗
委員	名古屋大学	教授	東村 岳史

# 論文審査の結果の要旨

## 1. 本論文の構成と概要

第1章では、本論文の目的、問い、方法を紹介する。本論文の目的は、「開発に伴う立ち退きと再定住」の脅威にさらされたフィリピンの都市貧困層が、いかに住宅の確保を目指してきたのかを、彼らの「日常の政治」に着目して明らかにすることである。事例としては、マニラ首都圏パシグ市のマンガハン放水路の不法占拠地域から、様々な再定住地に移転していった都市貧困層を取り上げる。著者は、2012年から2020年にかけてエスノグラフィーの手法を用いた調査を行った。この事例に基づいて、本論文は3つの問いを立てる。第一に、同じ強制移転の危険に晒されるなか、なぜ彼らは異なる住宅確保戦略をとったのだろうか。第二に、住宅確保をめぐる異なる戦略と帰結は住民間の対立をもたらしたが、なぜ関係の断絶につながらなかったのか。第三に、参加型住宅政策「ピープルズ・プラン」を通じて市内で再定住地を得た人びとは、なぜ自ら「市民的道德」に基づくコミュニティ・ルールを導入しつつも、それを柔軟に運用しているのかだろうか。

第2章では、先行研究の課題を検討し、本論文の分析枠組みを提示する。まず、強制移転に伴う困窮を緩和しようとする国際機関の政策アプローチは、貧困層を受動的な被害者および受益者と見なして、彼らのエイジェンシーを理解できない。次に、スラムにおける社会関係資本と相互扶助を強調する議論は、強制移転をめぐる住民が分断される理由をうまく説明できない。そして、スラム住民間の不平等に着目する研究は、より豊かな住民が社会運動を率いると想定するが、それは本論文の事例と合致しない。最後に、新自由主義の権力に着目する研究は、都市貧困層の周縁化や分断、左派組織と連帯した彼らの組織的な抵抗運動に着目する一方、彼らの日常的なエイジェンシーを軽視しがちである。これらに対して、本論文は、都市貧困層が、外部の権力や支援組織に従ってではなく、彼ら自身の「内的要素」——世帯の状況、福利の感覚、社会関係資本の状況——を主体的に考慮し、強制排除と再定住に対応する多様な戦略を展開していると主張する。

第3章は、研究の背景について概観する。フィリピンでは、2000年代中頃から新自由主義的な都市の再開発が進み、不法占拠地のスラムに暮らす都市貧困層の「開発に伴う立ち退きと再定住」が進められてきた。とりわけ2009年に台風オンドイの水害によって、マニラ首都圏で500名近い死者が出たことを理由に、政府は民間セクターやNGOとも協働しつつ、本格的な不法占拠者の再定住政策に着手した。従来通り郊外への再定住政策も進められたが、郊外で雇用を得られない人々が、市内の不法占拠地に戻って来てしまう問題があった。それゆえ、アキノ政権下では、住民の参加に基づいて市内での再定住地建設を目指す政策「ピープルズ・プラン」も実施された。第4章では、パシグ市のマンガハン放水路において、どのように不法占拠地が形成され、住民たちが台風オンドイの被害を経験し、そして「開発に伴う立ち退きと再定住」に直面したのかを記述する。

第5章では、一番目と二番目の問いに焦点を当てる。マンガハン放水路の住民は、強制移転の危機が迫るなか、(a) 郊外の再定住地 (off-city resettlement)、(b) 参加型住宅政策「ピープルズ・プラン」を通じた市内の再定住地での中層住宅建設 (in-city resettlement)、(c) 左派組織と連携して立ち退き拒否運動 (on-site development) という三つの戦略をとる集団へと分かれ、緊張関係や対立が生じた。彼らの異なる戦略を規定したのは、外部組織や政府の介入ではなく、そ

## 論文審査の結果の要旨

れぞれが世帯の状況（洪水による世帯や家計への影響）、家族の福利（強制移転の脅威がいかに関わりの平穏に影響を与えるのかなど）、社会関係資本（親戚からの送金、市内での仕事や仮住まいを助けてくれる友人や親戚がいるか）などを検討した結果である。

ピープルズ・プランを選んだ者は市内の再定住に成功する一方で、郊外の再定住地を選んだ者の中には困窮化する者もでた。左派組織と連携した立ち退き拒否闘争は頓挫した。これらの違いは、住民たちの中で対立や反目を招いた。しかし、それにもかかわらず、彼らは完全に関係を切ることはなく、相互扶助の関係を維持し続けた。ピープルズ・プランを追求した集団は、郊外の再定住地で困窮した人びとや、立ち退き拒否運動に頓挫した人々を受け入れた。再定住をめぐる対立と分断を超えて、長年にわたる共棲の関係を修復する力を持ったのである。

第6章では、最後の問いに焦点を当てる。ピープルズ・プランで作られた市内の再定住地では、政府と住民団体が「市民的道德」に基づく厳格で詳細なコミュニティ・ルールを導入した。それは、かつての生活の場であったスラムの生活様式を「悪徳」として拒絶し、市民的な生活様式を住民に根付かせ、「善き市民」へと変容させようとするものであった。これは、先行研究によれば、新自由主義の統治性が再定住地の社会秩序を規定した結果である。ただし、住民は日々の必要を満たすために自ら導入したルールと交渉し、些細な違反は黙認し合うようになった。その一方で、より重大なルールの違反は防ぐように気を付けた。人々は、新自由主義の統治性と交渉し、自らの福利を向上させるために社会秩序を再構成しているのである。

第7章は、本論文の分析結果と議論を要約し、政策提言を提示する。

### 2. 評価

本論文は以下のように学術的に評価できる点を含んでいる。

(1) マニラ首都圏における都市貧困層の居住問題は、これまで主にアンリ・ルフェーヴルやデイビッド・ハーヴェイをはじめとするマルクス主義の系譜か、国際開発機関による政策評価の文脈で論じられてきた。これらに対して、本論文はエスノグラフィーの手法を用いて都市貧困層の日常に寄り添いつつ、再定住を迫られた人びとが、いかに自らの手持ちの資源や福利の感覚をもとに「日常の政治」を実践しているかという新たな視点を提示した。たとえば、雇用機会の乏しい郊外への再定住は貧困層にも忌避されると議論されてきたのに対して、子どもの仕送りなどに期待できる年配者はあえて郊外への移動を希望するといった事例があることも指摘した。

(2) 本論文は、一つの不法占拠地で暮らしていた人びとが、多様な集団へと分かれ、異なる方法で再定住先を確保しようと悪戦苦闘する過程を、延べ14年にわたる長期間の調査に基づいて生き生きと描き出している。先行研究の多くは単一の時点だけの調査に基づいていたり、単一の集団だけに焦点を当てていたりすることと比べて、本研究の記述の濃さと広さは優れている。とりわけ、スラムで培われた貧困層の社会関係が一時的に破断されるも再構築されていく過程の記述は先行研究には見当たらない。2010年代、急速に進む都市の再開発を都市貧困層がいかに経験したのかを丁寧に記録した点でも重要である。

(3) 本論文は、参加型の再定住政策に加わったり、加わるができなかった貧困層の葛藤や挑戦に焦点を当てることで、重要な政策的含意も提示している。従来の参加型政策の多くは「参

## 論文審査の結果の要旨

加」を謳いつつも、固定化された特定の参加方法や規範を前提にしており、貧困層の置かれた多様で流動的な実態との間には齟齬がある。そうしたなか、本論文の記述は、いかに貧困層の多様性、柔軟性、創造力を活かしつつ、参加型の再定住政策をより実質化させていくことができるのかを示しており、示唆に富む。

ただし、以下のような不十分な点も指摘された。

(1) 都市貧困層の多様性と内的論理を重視する本研究の議論は説得的で、様々な事例が記述されているものの、人びとの属性がどのように住宅確保の戦略に影響を与えるのかについて、より体系的な説明が欲しかった。

(2) 住宅獲得運動をめぐるリーダーとフォロワーの関係について、本論文は様々な葛藤があったことを記述し、彼らがいかに社会関係資本を築いてきたかを論じる。しかし、フリーライダーの発生など、集合行為の問題に対して、彼らがいかに対処してきたのかは十分に分析していない。また、市内と郊外の再定住地では、異なる集合行為の問題があったはずで、その違いも分析すべきであった。

(3) 参加型再定住政策のピープルズ・プランは、画期的なプログラムであったが、その多くは成功に至らず頓挫している。そのことを念頭に置くと、なぜこの事例ではピープルズ・プランがうまくいったのか、その成功要因を他の事例と比較して特定することも重要な課題であったはずである。

もっとも、これらは本研究の博士論文としての価値を損なうものではなく、今後の研究課題として克服が期待されるものである。

### 3. 結論

以上の評価に基づき、審査員一同は一致して、本論文を博士（国際開発学）の学位を授与するに値するものと判定した。